特集

輪読会立ち上げ、そしてさらなる　発展へ

高崎経済大学経済学部教授 ◎ 池野 正晴

大学の１年次後半から２年次の頃のことである。

学科・専攻(教育学)を同じくする仲間と、原典を読む輪読会を立ち上げたことがあった。欧米の思想家の古典(原典)を読む会をしようということになり、始めたものである。原典と言っても、原書そのものではなく、日本語に訳されたものである。専攻の先生方も含めて学科では、しばしば懇親の会を実施していたが、その際に、先生方からの助言もあって始めたものと思う。

曜日とか時間の詳細についてはもう思い出すことはできないが、仲間のみんなが空いている、午後の後半の時間を使った記憶がある。副専攻等は各自それぞれ異なり、私の場合は英語の教員免許科目の履修も多くあり、また、英語クラブの活動(部長)もあり、時間表やスケジュールもかなりの程度詰まっていた印象があるものの、共通の時間をとるのに苦労をした覚えはない。学科の先生方からも輪番形式で出ていただき、プリントなどを用意してくださる先生方もおられ、ほとんど講義をしてもらったような記憶もある。輪読テキストとして使用のものは、だいたい岩波文庫に訳されているもの(例えば、ジャン・ジャック・ルソーやジョン・ロック、ジョン・デューイらの著作)を使用し、ある程度章を選びながら、輪読形式で読んでいった。単位とは関係のないサブゼミみたいな感じであった。

そうこうするうちに、その輪読会のなかで、新しい教育を実践している先進校などの視察・研修旅行をしようということになり、先生方のコネクションを頼りに、計画は立てられた。

記憶に残っているのは、玉川大学やその附属学校(当時労作教育、労作学校で有名)、東京学芸大学のなかにできたばかりの「教育工学センター」、NHKの生のスタジオなど。どういう順番で訪問したのかは、さっぱり覚えていない。宿泊は、東京学芸大学のある学生寮にお世話になったことは記憶している。

東北大学がご出身の先生からは、東北大学から玉川大学に移られた高名な先生を紹介していただいた。その先生を頼りに、玉川大学を訪問することができた。玉川大学では、お昼を学長室でいただいた。学長は、今や日本の教育史に名を残す初代学長の小原國芳氏である。数々の教育実践とたくさんの著作を残されておられる方である。お昼をいただきながらの懇談のなかで、学長が直々に、私に対して投げかけられたお言葉にはびっくりさせられた。「住み込みで、修業に自分の家に来ないか」と誘われたのである。そのようなことが可能なものかどうかも分からず、すぐに「はい」という訳にもいかなかったことを覚えている。冗談で言われたものと思われるが、たいへん嬉しく、光栄に思ったものである。

また、東京教育大学(今の筑波大学)がご出身の先生からは、お二人の同級生を紹介していただいた。お二人が、それぞれに就職・活躍している現場にお邪魔することができた。　一つは、東京学芸大学であった。当時、教育工学という言葉が始めて使われ出した頃で、「教育工学センター」はその最先端のところにあった。

もう一箇所は、NHKのスタジオであった。当時NHKのアナウンサーでは、五本指に入るといわれたあるアナウンサーが直接スタジオのなかを案内してくださった。いくつかのスタジオを見学し、実際に収録をしている歌番組のスタジオのなかにまで入れていただいた。当日のゲストのなかに、当時有名であった女性歌手ジリオラ・チンクエッティさんがおられ、階段状のステージで歌を歌われていた。歌い終わった後、私たちの近くに来られた。私は、少しかじっていたイタリア語を使う絶好の機会と見て、恐れ多くも話しかけたのである。お返事が返ってきたのには、たいへん感激したものである。

実は、イタリア語についても、ドイツ語と歴史学を教えてもらっていた先生が特に目をかけてくださり、開いてくれたイタリア語の勉強会に参加し、英語で書かれた語学本を使ってイタリア語を習っていたのである。また、イタリアの縁はさらに続き、３年のゼミでついた先生が、当時ちょうど『イタリア教育史』の執筆をされておられ、私の力がほんの少しだけ役立ったことがあったことも今や思い出の一つである。

視察旅行以後、ますます教育学の研究に拍車がかかったことは言うまでもない。